

大吟醸向け酒米新品種

「さかほまれ」
栽培マニュアル

福井県農業試験場 品種開発研究部
奥越農林総合事務所

「さかほまれ」の品種特性

1 はじめに

「さかほまれ」は、大吟醸用の酒造好適米を目指して育成された品種である。

2 品種特性（表1）

- ①成熟期は山田錦より2日早い。
- ②稈長は山田錦よりやや短く（写真1）、山田錦より倒伏に強い。
穂数は山田錦よりやや多い。
- ③脱粒および穂発芽は山田錦よりしにくい。
- ④千粒重は25.4gで山田錦並、粒形も山田錦と同等である（写真2）。
- ⑤収量は山田錦よりやや多い。
- ⑥心白発現率は山田錦より高い。
- ⑦心白が中心に小さく入ることにより、35%まで搗精が可能である（写真3）。



写真1 標本

左：さかほまれ 右：山田錦

系統・品種名		さかほまれ	山田錦	五百万石
形質				
熟期		晩生の晩	晩生の晩	早生
出穂期(月・日)		8.12	8.13	7.14
成熟期(月・日)		9.26	9.28	8.16
稈長(cm)		93	103	82
穂長(cm)		21.8	23.1	23.6
穂数(本/㎡)		483	446	329
耐倒伏性		中	弱	中
脱粒性		難	やや易	難
穂発芽性		中	やや易	中
耐病性	葉いもち	弱	弱	やや弱
	穂いもち	弱	弱	弱
精玄米重(kg/10a)		496	478	602
精玄米重標準比(%)		104	100	121
玄米千粒重(g)		25.4	25.9	26.9
心白発現率(%)		69	57	－

※2015年～2017年の場内試験の平均値(精玄米重データは2016,2017年の2か年)

収量調査篩は2.0mm。移植日:2015年:5月8日、2016年:4月28日、2017年:5月15日

表1 さかほまれの特性

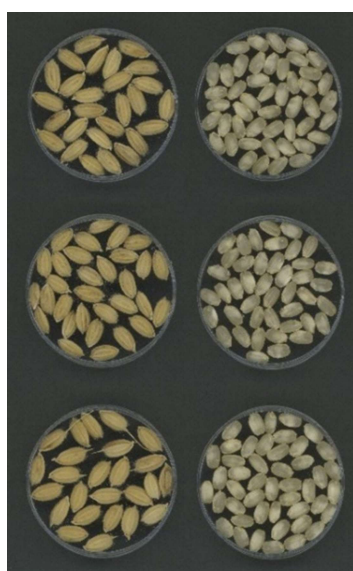


写真2 籾・玄米

さかほまれ

山田錦

五百万石

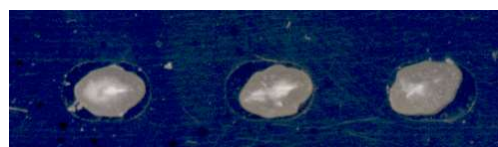
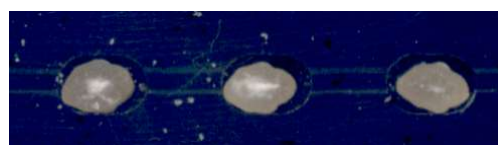


写真3 心白断面図

○ さかほまれは大吟醸酒向けの酒米です

大吟醸酒とは

良質な米の外側を50%以上削った白米を用い、特に丁寧に作った酒。タンパク質などの雑味の原因を削ることですっきりとした味になる。

日本酒の消費量が年々減少する中で、大吟醸酒は年々増加しており、海外でも『SAKE』に対する注目が高まり、需要も高まっている。

品質目標（大吟醸酒用の酒米に求められる品質）

50%以上の搗精でも砕けない品質

- ・ 大粒であること
- ・ 胴割米が少ないこと
- ・ タンパク含有率が 7.0%以下 であること
- ・ 心白が小さく真ん中に入ること

栽培方法

特別栽培④（化成肥料由来の窒素成分 5.0kg/10 アール、対象の化学農薬 10 成分以内。）
※指定の肥料、農薬以外を使用しない。

ほ場の選定

前年に雑草が少なく、紋枯病が発生していない圃場を選定する。また、さかほまれは生育期間が長いため、地力の高い圃場が良い。

育 苗

- (1) 種子消毒・・・テクリードCフロアブルを200倍希釈し、種子を24時間浸漬する。種子消毒温度 10℃～15℃
- (2) 浸種・催芽・・・（慣行の方法に準じる）
浸種温度 10℃～15℃
積算温度 100℃（10℃×10日、15℃×7日）
催芽温度 30℃（病原菌の増殖を防ぐため、30℃を超えないように。）
- (3) 播種量・・・通常の主食用品種より大粒であるため、播種量を増量し苗立ち数を確保する。
基準播種量 乾粳で170g/箱が目安（参考 R元産千粳重 28.3g）

- 覆土前、カスミン粒剤を散布する。
- 覆土後、育苗器に入れ、均一な出芽を促す。



- (4) 育苗・・・（慣行の方法に準じる）
 - 緑化や硬化では、育苗ハウス内に必ず温度計を設置し、ハウス内の温度に注意する。20℃～25℃を目標とし、日中、過度の高温とならないように換気を行う。
 - 苗丈はコシヒカリ並である。



コシヒカリ

さかほまれ

五百万石

山田錦

写真4 稚苗（播種後20日）

施肥

【 すご稲有機 R355 施肥体系】

- 基肥に有機質 50 %の「すご稲有機 R 3 5 5」を使用する。
- 圃場の地力により施肥量を加減した場合は、穂肥分として溶出する肥料分も増減する。生育期間が長く、肥料切れが予測されるため、一括肥料だが穂肥を施用する。また、必ず生育を観察し、葉色に応じて中間肥の施用を判断する。

① 基肥一括

	窒素施用量 (kg/10アール)	すご稲有機 R355 (kg/10アール)
低地力圃場	6.9	53
標準圃場	6.9	53
高地力圃場	6.0	46

※中間肥（6月中旬）6月中旬に葉色4を下回るようなら施用する

	窒素施用量 (kg/10アール)	有機アグレット674 (kg/10アール)
全ての圃場	1	10

② 穂肥 幼穂長 2 mm時に施用

	窒素施用量 (kg/10アール)	エコレット048 (kg/10アール)
全ての圃場	3	30

【エコレット048 施肥体系】

① 基肥

	窒素施用量 (kg/10アール)	エコレット048 (kg/10アール)
低地力圃場	5	50
標準圃場	5	50
高地力圃場	4	40

② 中間肥（6月中旬）

	窒素施用量 (kg/10アール)	有機アグレット674 (kg/10アール)
全ての圃場	1	17

③ 穂肥 幼穂長 2 mm 時に施用

	窒素施用量 (kg/10アール)	エコレット048 (kg/10アール)
低地力圃場	5	50
標準圃場	4	40
高地力圃場	3	30

【施肥基準】

基肥窒素量 + 中間肥窒素量 + 穂肥窒素量
5 kg/10 アール 1kg/10 アール 4 kg/10 アール

〔基 肥〕 初期生育を確保するために施用する

〔中間肥〕 穂肥までの期間が長いので、肥料切れにならないように施用する

〔穂 肥〕 登熟を良くして収量・品質を向上させるために施用する

- 特別栽培④の基準に適合するために化成肥料由来の窒素成分が 5.0kg/10 アールを超えないようにする。
- リン酸の不足する圃場では、土づくり資材や基肥で補給を行う。

田 植 え

移植時期・・・5月連休中

- 晩生品種であるため、田植えが遅くなると収穫時期が遅れ、登熟不良（青米・くず米の増加など）の原因となりやすい。

栽植密度・・・坪60株

- 疎植にすると遅れ穂が増加し、青米・くず米が増加する原因となり、酒米としての品質が低下する。

水 管 理

- ① 生育初期・・・田植え後の無効分げつの発生を抑制するため、5 cm程度の湛水管理を行う。通常 3cm 程度の浅水）。
- ② 中干し・・・**莖数 20 本/株**を越えたら中干し開始する。
 - 中干し期間は5～10日を目安とする（乾かしすぎで大きなひびが入るような中干しは、大切な稲の根を切断してしまうので行わない。）。
- ③ 中干し後・・・収穫間際まで、間断通水を継続する。
 - 出穂時には5cm程度にしっかり湛水する。
 - 胴割米対策として、収穫直前まで気をつける。
 - 台風、フェーンの際は5cm以上湛水する。

病虫害防除

時期	薬剤名	成分数	対象病虫害
種子消毒	テクリードCフロアブル	1	ばか苗病、粃枯細菌病
覆土前	カスミン粒	0	粃枯細菌病
田植前	箱大臣粒剤	3	いもち病・害虫・紋枯病
穂ばらみ期	バリダシン	0	紋枯病
(臨機)	カスミン液剤	0	いもち病
穂揃期	ダントツ粉剤	1	カメムシ
傾穂期	スタークル粉剤	1	カメムシ

- 箱剤および出穂期の防除で、いもち病に効果のある薬剤を施用する。
- 本田防除において、早生品種が周辺にある場合は、早生品種を収穫した後に防除を行う。
- 化学合成農薬の使用を最小限に抑えるために、I P M（総合的病虫害管理）※の手法を取り入れ、必要に応じ以下の技術を実践する。

(参考)・「紋枯病は多発田のみで省力的に防除」(平成 30 年度実用化技術)

紋枯病は毎年同じ圃場で発生するので、前年発生が多かった圃場を防除することで、当年の被害を抑えられる。

・「冬季湛水によるニカメイガの防除」

稲の刈り株で越冬するニカメイガ幼虫は、10 月の耕起と 11 月下旬からの湛水により減らすことができる。

・「出穂前に畦畔や農道などの雑草地を除草することで斑点米の発生防除」

稲の出穂期に水田に侵入し斑点米を引き起こすカメムシは、雑草地で増殖するので、出穂期以前に雑草地を刈り払うことで、発生を防ぐことができる。

※ I P M（総合的病虫害管理）

農薬により病虫害を完全に撲滅したり、漫然と薬剤を定期散布したりするのではなく、農地を取り巻く環境状況と対象種の個体群動態を考慮しつつ、生物的防除、化学的防除、耕種的防除、物理的防除等を矛盾無く組み合わせることで、病虫害の密度を経済被害を生じるレベル以下に抑えようとする方法を IPM（総合的病虫害管理）という。

農業者にとっては、化学農薬の使用を最小限に抑えることとなり、コストの削減と同時に、安全で消費者に信頼できる農作物を安定生産できるメリットとなる。

除草対策

田面の均平、漏水防止、雑草の種類確認を行い、除草剤を効果的に利かす。

本田の除草（農薬成分が4成分以内となるよう選択して使用する）

初中期一発剤	作付け前年の雑草発生状況に応じて使用
中～後期除草剤	クリンチャー（1成分）またはバサグラン（1成分） （雑草の発生状況を見て必要に応じて使用する）

畦畔の除草

5月下旬～6月上旬	カメムシの発生を抑制するために、機械除草を行う
6月下旬～7月上旬	〃

収穫・乾燥調製

- ① **収穫** 胴割米発生防止のため、刈り遅れに注意する。
 - 粳の熟色を確認し、青粳残存率40%で刈取りの準備を始める。
 - 刈り取り目安は粳水分25%、積算気温1,000℃。
- ② **乾燥、調製**・・・胴割防止のため、ゆっくりと行う。
 - 乾減率（乾燥時の1時間当たりの粳水分減少率）は0.6%/時以下とする。
 - 2.0mmの網目で調製する。

秋起こし

- 収穫が終わったら気温の高いうちに秋起こしを行い、稲わらをすきこむことにより、稲わらの腐熟を促す。
- 土づくり資材などの施用で地力を向上する。